

社会貢献活動30年のあゆみ



The Story of Philanthropic Activities

Contents

03 真に豊かな社会の実現へ

04 ごあいさつ

05 三菱商事の社会貢献活動の原点

06 活動の始まり 住みよい豊かな社会のために

08 社会貢献活動の30年

- ・社会貢献30年の歴史 年表
- ・社会貢献関連 支援先一覧
- ・広がる地域貢献施策
- ・社会貢献活動を想う 歴代室長からのメッセージ

18 「母と子の自然教室」の30年

- ・自然教室30年のあゆみ
- ・社員ボランティアの声
- ・参加親子の思い出
- ・「母と子の自然教室」を回顧する

真に豊かな社会の実現へ

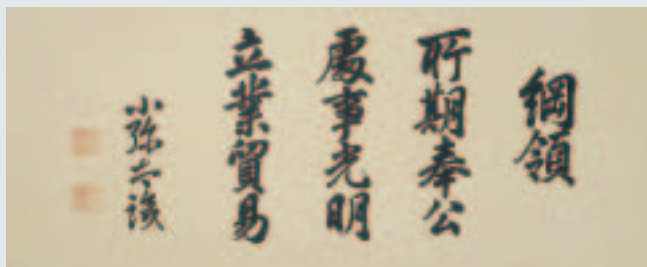
三菱商事の企業文化には、社是である三綱領を拠り所に、真に豊かな社会の実現を目指して、地域社会や国際社会と共に発展していこうという思いが深く根を下ろしています。

1973年には、「企業は社会の一員として社会貢献事業を積極的に行うべきで、そのための経費は企業が社会で存

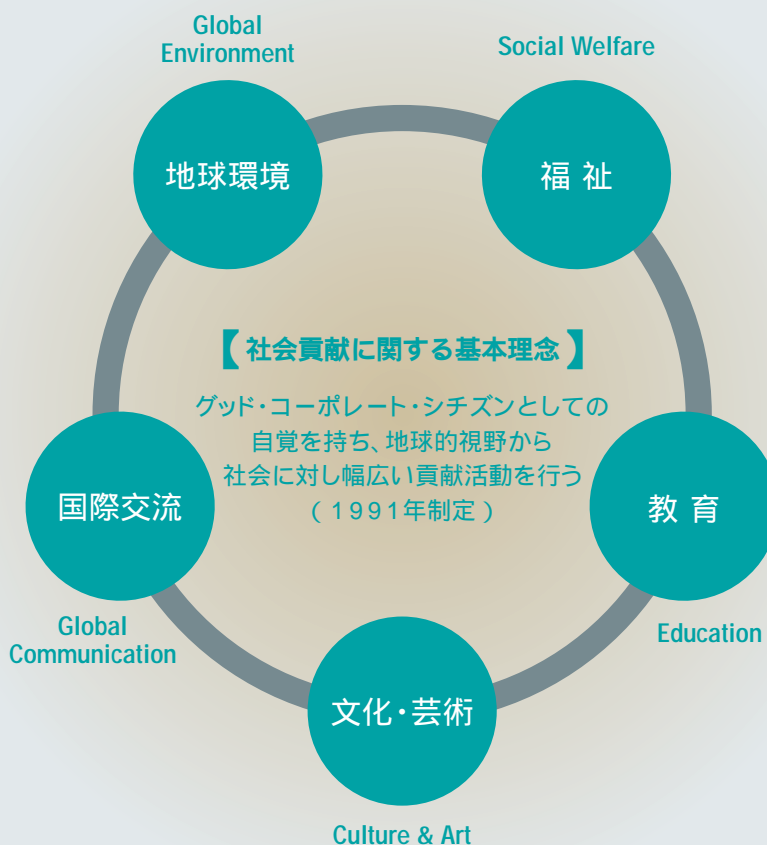
続するための社会的経費(ソーシャル・コスト)として、利益を得る前に負担しなければならない」という認識の下、「社会環境室」が設立されました。以来私たちは、より豊かな社会づくりに貢献すべく、社会貢献活動を推進しています。

三綱領

三菱グループの経営根本理念です。持続可能な発展に向けた取り組みにおける三菱商事のビジョンの基礎になっています。



所期奉公	事業を通じ、物心共に豊かな社会の実現に努力すると同時に、かけがえのない地球環境の維持にも貢献する。
処事光明	公明正大で品格ある行動を旨とし、活動の公開性、透明性を堅持する。
立業貿易	全世界的、宇宙的視野に立脚した事業展開を図る。



ごあいさつ



代表取締役常務執行役員
社会・環境委員会 委員長
上野 征夫

社会貢献活動30年に当たって

三菱商事の社会貢献活動は、1973年、世界貿易センターでの藤野社長(当時)のスピーチが出発点でした。スピーチの中で藤野社長は、「ソーシャル・コスト」という新しい概念を打ち出しましたが、社員たちはこの新しい概念を違和感なく、自然に受け入れることができました。これは、社内に創業以来の精神である「所期奉公、処事光明、立業貿易」の三綱領の精神が脈々と受け継がれてきていたことの証しにほかならないと思います。三綱領の精神に則って、常に社会との共生という視点で仕事に取り組んできたことで、当時既に、三菱商事には社会に貢献するという素地が出来上がっていたのです。三菱商事では、藤野社長のスピーチを機に社会環境室を設置、これ以降さらに積極的な活動を展開してきました。

しかし、近年、グローバル化の進展などにより、企業の活動領域は飛躍的に広がり、社会に与える影響が格段に大きくなったことから、社会が企業を評価する視線はさらに厳しくなり、企業の社会的責任(CSR)に対する関心がますます高まっています。「企業は社会に何をもたらすために存在するのか」ということが今改めて問い直されてい

るのです。われわれ企業、また企業人は、この命題に対して今まで以上に真剣に向き合っていかなければなりません。特に三菱商事は、世界の多くの国や地域でビジネスを展開し、携わっている分野も多岐にわたることから、今後、CSRを問われる場面はますます増えてくるでしょう。その中で、社会と企業の持続的な相乗発展を実現するために、引き続き積極的に社会貢献活動に取り組んでいきたいと考えています。

また、三菱商事の社会貢献活動の基本は、単にコストを負担するだけでなく、社員自らが自発的に活動に参加することにあります。その活動のひとつである「母と子の自然教室」は30年間続いており、1983年から事務局スタッフに加え社員ボランティアが自主的に運営にかかわるようになりました。その社員の力が「母と子の自然教室」をずっと支え続けているのです。私も昨年、4日間社員ボランティアと共に汗を流し、子どもたちと触れ合うことで「母と子の自然教室」の意義を改めて強く実感しました。

社会貢献活動30年という節目を迎え、今後も広く社会に貢献し、社会と共に成長する企業で在り続けたいと思います。

三菱商事の社会貢献活動の原点

1973年7月19日、藤野忠次郎社長(当時)は世界貿易センターで、社会貢献の重要性について講演しました。これをきっかけに、同年10月、社内に社会環境室が新設され、実質的に三菱商事の社会貢献活動がスタートします。三菱商事の社会貢献活動の原点と位置付けられる藤野社長講演を抜粋して紹介します。



元代表取締役社長
藤野 忠次郎

「企業の責任」について

豊かさの時代には、人間の生き方について価値観に大きな変化が見られると同時に、成長経済時代のひずみがこれに拍車をかけ、企業の社会に対する責任ということについて、企業特に大企業は、根本的に考え直さなければならぬときに来たと考えられます。特に大企業のレゾナードルは、期間損益の大小によって判断されるべきものではなく、長期的なダイナミズムあるいは長期的な視野に立って、情勢の変化に順応する柔軟な体質を持っているかどうかによって、その存在価値を判断されるべきであります。

今や日本の企業における最大の課題は、長期的視野に立って情勢に順応すること、すなわち、企業の社会的責任に対しどう取り組むかということにあると存じます。

従って企業は、その企業活動を通じて(生ずる有形無形の)社会的コストをまず負担し、企業としての社会のserviceを提供した後に、利益を享受すべきであるということとであります。

今後企業は、社会的コストをいかに負担し、住民の自由といかに合致して、住民あるいは個人を抑圧しない環境を整備するかというようなことについて、例えば株主総会において、その具体的経営方針を発表し株主の合意を得ると同時に、その具体的計画を企業の年次別あるいは長期の経営計画の中に、社会的コストとして算入し企業活動をするということ、また次の株主総会においては過去に発表した社会的責任をいかに実行したかを報告すると同時に、今後どう進めるかについても、常に株主総会において発表する形で一般に公表すべきような形を取るべきではないかと考えます。

また、企業は本質的には利潤を追求してその上で生きていられるのでありますから、その社会的責任の果たし方も、単純な慈善事業を行うのであっては長続きすることではないと考えられ、企業は企業らしく、短期的に採算がとれなくても長期的にはあるいは採算のとれるかもしれぬといった採算分岐点上のプロジェクトに、積極的

に立ち向かうべきであり、かかるプロジェクトが、住民の福祉に関連のある情報・技術・機器の開発であれば申し分のないこととなるかと考えます。

今、世界はイデオロギーあるいは体質の差にもかかわらず、あらゆる国がその経済を発展させることに意欲的に取り組んでおります。日本も今後、この国際社会の中で優良な一員として世界の発展に寄与するためには、大企業もさらに世界企業の規模にまで成長し、国と共に発展途上国の経済発展に協力すべきであります。

しかしながら、そのような大企業が日本国内において社会的責任を考えず、自己の利益のためだけの行動を起こしたら、その及ぼす混乱がいかに深いものかを考えますれば、大企業は自らを制して、その社会的コストを積極的に負担し、いさかも個人の自由を損なわず、個人を抑圧するといふ環境をつくらぬということは今から真剣に考えて、経営政策を大胆に打ち出すべきであろうと思います。(一部抜粋)

活動の始まり

住みよい豊かな社会のために

第1事業 人工臓器の研究・開発

生命

尊い生命を救うため



三菱商事の社会貢献・第1事業は、尊い「生命」にかかわる「人工臓器の改良・開発」の研究でした。人工臓器は、肺や腎臓のように本来人間の体に備わっている器官の代わりとして、同じ働きを果たすよう人工的に造られたもので、手術の際などに使用されます。しかし、1970年代初頭はまだ十分な開発がされておらず、心臓手術などで使われる人工肺の使用可能時間は約2時間が限度で、より長時間を要する手術には使用できないなど、実用化には至っていませんでした。そこで、三菱商事は1974年3月、「日本人工臓器開発研究所」を設立し、世界でもトップレベルにある米国・クリーブランド・クリニックの協力を得て、人工肺

の改良・開発への挑戦を始めました。その結果1978年には、7～8時間の開心手術も安全に行える「膜型人工肺」の開発に成功、当時としては画期的な成果を上げました。

三菱商事が資金を負担し、クリーブランド・クリニック人工臓器研究所が開発した膜型人工肺の特許は、本来三菱商事に帰属するものでしたが、これを米国に設立された財団法人「人工臓器日本基金」に寄贈しました。そして同財団では、膜型人工肺にかかわる特許の使用許可を世界各国の医療機器メーカーに与え、その使用料を財源として、さらに人工臓器の研究と開発を推進しました(1979年3月終結)。

06

第2事業 リモート・センシング

環境

自然環境・資源保護を目的に



自然環境や限りある資源を守るため、第2事業は、「リモート・センシング技術」の研究・開発を実施しました。リモート・センシングは、1972年、米国が世界初の地球観測衛星「ランドサット」を打ち上げ、宇宙から地球を調査したデータが利用できるようになったのを機に、注目され始めました。

日本は、米国と違い、山が多く海に囲まれた細長い国土であるために、わが国独自のリモート・センシングの技術開発が必要でした。そこで三菱商事は、1975年7月、三井物産、科学技術庁(当時)などと共に、財団法人「リモート・センシング技術センター」を設立、日本の実情に合った「航空機によるリモート・センシング技術」の開発に尽力

しました。

1977年8月7日に起こった有珠山大噴火は、大量の降灰や地殻変動による家屋の倒壊・道路の寸断など、周辺に大きな被害をもたらしました。このとき三菱商事は、噴火中の有珠山上空に航空機を飛ばし、リモート・センシングによる調査を実施、その後の噴火予知や災害対策に大いに貢献しました。このほか、滋賀県・琵琶湖の湖流調査、東京の環境調査、多摩川の流域開発に伴う汚染と洪水対策調査、南九州地区の熱資源調査、富山湾に流出する河川水調査などを手掛けて、調査結果やデータを学会などで発表、大きな成果を上げました(1988年3月終結)。

三菱商事は1974年、人間にとって大切な“生命”“環境”そして“こころ”にかかわる三つの事業をスタートさせました。その後、1979年には第4の事業として、社会的関心が高まりつつあった“福祉”にかかわる活動を開

始、収益につながるかどうかとは関係なく、これらの事業を社会的経費として負担すべきものであると考え、展開してきました。現在の社会貢献活動の基礎となった、四つの事業を振り返ります。

第3事業 母と子の自然教室

こころ

こころを豊かにすることを目的に、三菱商事は第3事業として、母と子に自然の中で人間と人間、自然と人間との触れ合いを体験していただく「母と子の自然教室」を実施してきました。

今から30年前、世の中は高度成長期で経済発展が進む一方、精神的な面では何か大切なものを失いかけているような実感がありました。かつて、子どもたちが自然の中で無心に遊び戯れることで豊かな想像力を育み、大人たちも暮らしの知恵や手作りを大切にしてきたことをこの自然教室で体験し、「本当の豊かな社会とは、こころと物のバランスが取れた社会なのだ」ということを実感してもらおうとの思いから1974年5月

にスタートしました。

自然教室では、東京都内に住むひとり親家庭を対象に(開始当初は母子家庭と一般家庭)素朴な自然の中で、野菜の収穫、ハイキング、魚釣り、草花遊び、麦わら細工・竹細工などの手作り教室、キャンプファイアーなどをしながら社員ボランティアと共に4日間を過ごします。活動にかかる諸経費はすべて三菱商事が負担し、参加者はこの30年間で約15,000名にも及びました。1990年には、継続性、テーマ、社員参加が高く評価されて厚生大臣より表彰を受けました。毎年100名以上の母と子が参加し、さまざまなプログラムを通じて、自然との触れ合いを体験しています。

人と人、自然と人の
こころの触れ合い



07

第4事業 重度身体障害者の職能開発

福祉

第4事業は、障害者が社会に出て働く能力を身に付け、たくましく自立していくことを支援する「福祉」にかかわる活動です。

三菱商事は、重度身体障害者の方々も健常者と同じように働くことのできる社会こそが豊かな住みよい社会である、と考えています。そのような社会の実現を積極的に支援するため、まず1979年に、社会福祉法人「東京コロニー」と「太陽の家」(大分県別府市)に訓練用コンピューターを寄贈しました。さらに、これを単なる寄付行為だけで終わらず、障害者がプログラマーとして職業的に自立するための訓練と環境作りに着手。1980年には太陽の家、1982年には東京コロニーにそれぞれ情報処理セ

ンターを開設し、重度身体障害者の本格的な職能開発を始めました。

当時、障害者がプログラマーやシステム・エンジニアとして自立することは、社会復帰の道に新しく頭脳労働の分野を切り開くという画期的なものでした。1983年12月には、太陽の家と三菱商事の共同出資により、新会社「三菱商事太陽株式会社」を設立。同社は、コンピューターによる情報処理の受託、マルチメディア・コンテンツの制作、オンデマンド印刷、Webコンテンツの制作などを手掛け、自らの力で経済的な自立を実現しようと活動し続けています。

この社会を共に生きる



社会貢献活動の30年

三菱商事では、1973年の社会環境室設置以来、国内外でさまざまな社会貢献活動を行ってきました。真に豊かな社会を実現するため、展開している活動分野は、「地球環境」「福祉」「教育」「文化・芸術」「国際交流」の五つ。今後もさらに推進していきたいと考えています。三菱商事が30年間で行った社会貢献活動を年代別に紹介します。

1970s

母と子の自然教室（07・18～27ページご参照）

人工臓器の研究・開発（06ページご参照）

リモート・センシング（06ページご参照）

東京コロニー

東京コロニーは社会就労センター（授産施設）や福祉工場など、障害者の特性に合わせた職場を提供し、障害者が仕事を通じて「（社会への）完全参加と平等」を実現することを目的とした社会福祉法人で、中親コロニーなどとの合併を経て、1968年に「社会福祉法人東京コロニー」として認可されました。印刷業を中心に活動を始め、ホームページ制作などのIT事業や防災安全用品製造など徐々に事業を拡大しており、現在では東京都内9カ所の社会福祉施設に、360名を超える障害者の方々の働く場を提供しています。

三菱商事では'79年に訓練用コンピュー

ターを寄贈した後、'93年からは、東京コロニーの重度身体障害者在宅パソコン講習事業等の「教育」、職業紹介・コンサルティング事業などの「雇用支援」、SOHOの支援事業などの「就労支援」という障害者自立への三つの柱をバックアップすべく、支援を続けています。



1980s

三菱商事太陽

三菱商事では、1979年から社会福祉法人太陽の家への支援を行ってきました。太陽の家は、障害者がプログラマーやシステムエンジニアとして社会で就労するための授産施設を支援する目的で設立されたもので、三菱商事は、その授産科目である「情報処理科」を支援するべく継続的に寄付をしています。その結果、プログラマーとして自立可能な障害者も多数育ってきたため、彼らが社会復帰し、能力を發揮する職場として、三菱商事と太陽の家との共同出資で'83年、「三菱商事太陽株式会社」が設立されました。

コンピューターによる情報処理の受託、マルチメディア・コンテンツの制作、オンデマンド印刷を主な事業内容とし、受注から納品までを障害者自らの手で管理・運営しています。



1990s

熱帯林再生実験プロジェクト

世界各地における熱帯林の減少は、人類の存続にもかかわる重大な問題の一つです。熱帯林は、一度破壊されたら元の姿に戻るのに300～500年かかるとも言われ、その減少は、自然生態系の保全や温暖化の原因であるCO₂の吸収、異常気象・自然災害など地球環境の保全に大きな影響を及ぼしています。

三菱商事では、1990年に「マレーシア熱帯林再生実験プロジェクト」を開始し、横浜国立大学名誉教授宮脇昭博士による潜在自然植生理論に基づく“ふるさとの木によるふるさとの森づくり (Native Forests with Native Trees)” に積極的に取り組んでいます。この理論は、現地固有の植物を密植・混植方式で植林して40～50年という短期で自然林に近い生態系をよみがえらせるというもので、「マレーシア熱帯林再生実験プロジェクト」に続いて'92年には「アマゾン熱帯林再生実験プロジェクト」も開始されました。三菱商事は企画から運営管理、資金調達を担当、実験開始から5～10年が経過した今、小さいながらも熱帯林の森が育ちつつあります。今後も産業界、研究機関、政府機関との連携の下、世界の熱帯林再生事業に寄与していきたいと考えています。また、2001年には、経済発展により環境破壊が進んだ中国・上海市で、「グリーンベルト・プロジェクト」が進められ、三菱商事はエリア内の一部で宮脇方式による植林を行っています。



2002年8月現在



1991年7月
マレーシア熱帯林再生実験
プロジェクト第1期植樹祭

外国人留学生奨学金

三菱商事では、1991年から、世界でリーダーとして活躍が期待される優秀な外国人留学生を支援することを目的とした奨学金制度を設けています。現在は慶應義塾大学や早稲田大学など、



5校の指定大学から1名ずつ推薦された、経済学、商学、法学、社会学を専攻する大学・大学院の留学生を対象として、奨学金を1年間授与しています。

七里ガ浜クリーンアップ

「七里ガ浜クリーンアップ」は、1991年に社内で社会貢献活動の新企画を公募した際に採用された活動です。第1回目は同年11月10日に行われ、社員やその家族、友人など約140名と、地元の自治会やボランティア団体を合わせた総勢約260名が集合しました。開会式の後、三菱商事から支給された軍手とゴミ袋を手に、



全長約3キロの海岸のうち600メートルを掃除、1時間後には燃えないゴミ100袋と燃えるゴミ400袋が収集されました。その後、多摩川のクリーンアップ活動も開始し、96年まで実施しました。

中部支社自然教室

この自然教室は、名古屋YMCAの主催、三菱商事の協賛により1991年から開催しています。毎年夏に、愛知県下の児童養護施設の小学6年生約35名を岐阜県郡上郡高鷲村のキャンプに招待し、大自然の中でゲームやキャンプファイアーをしながら2泊3日を過ごします。毎年、三菱商事の社員ボランティアが参加しており、YMCAのスタッフと共に事前トレーニングや打ち合わせを行い、プログラムを作り上げています。



大分国際車いすマラソン大会

三菱商事は、1981年の国際障害者年を記念して開始された「大分国際車いすマラソン大会」(大分県ほか主催)に'91年から協賛しています。この大会は、世界最大の規模とレベルを誇る障害者スポーツ競技会の一つです。三菱商事では、障害者の社会



参加が促進され、障害に対する人々の理解が深まるとともに友情の輪が世界中に広がっていくことを願い、社員ボランティアが毎年参加、会場設営準備や選手のケアなど、レースの運営に協力しています。

劇場「アーツフィア」の支援

三菱商事は、1992年から異業種の企業が参加する支援グループ「東京オペニオンズ」参加企業として、東京・天王洲にある劇場「アーツフィア」の活動を支援しています。

劇場が2001年から取り組んでいるバリアフリー活動にも積極的に参加しており、社員ボランティアが障害者・高齢者の案内、車いすの介助、エレベーターへの誘導補助などを行っています。



日米草の根交流サミット大会

財団法人ジョン万次郎ホイットフィールド記念国際草の根交流センターは、日米交流促進のための財団法人で、三菱商事は1992年の設立当初からこの財団の理事会社を務めています。

同センターが主催する「日米草の根交流サミット大会」は、毎年日本と米国が交互に開催地となって、両国の市民が個人の立場で自由に意見交換し、相互理解と親交を深めることを目的としています。2003年は、10月に千葉県で第13回大会が開催されました。



はばたけ21 未来の子どもたちへ

ロシア極東地方のハバロフスクとウラジオストクの小学生30名を新潟に招待し、新潟市の小学生30名、地元ボランティアなどと共に1週間を過ごす国際交流プログラムです。三菱商事新潟支店が発案・協力し、地元企業・行政との連携で、1992年に三菱商事

の地域貢献施策の一環としてスタートしました。

この活動を通じて、子どもたちは、生活・習慣や意思疎通を図る言葉の違いなどの問題を乗り越え、身振り手振りでも心が通じ合えるということを身をもって体験しています。



丸の内市民環境フォーラム

三菱商事は、1993年から東京海上火災保険、日本航空システムと共催で、一般の方々の環境への関心と理解を深めることを目的に、毎年、「丸の内市民環境フォーラム」を開催しています。このフォーラムは、さまざまな分野の専門家が環境に関連したテーマで講演する環境入門講座で、

これまでに共催3社の社員をはじめ、広く一般の方々にも多数ご参加いただいています。



国際フレンドシッププログラム

このプログラムは、北浦和にある「国際交流基金日本語国際センター」で研修中の外国人日本語教師と、三菱商事をはじめとする三菱グループ4社（東京三菱銀行、三菱地所、旭硝子）の社員ボランティアが約半年にわたり交流を続けるもので、1993年から2002年まで実施しました。社員ボランティアは外国人研修生の“サポーター”としてお茶会や顔合わせパーティー、ガーデンパーティーなどでの交流を通して日本語上達のお手伝いをします。外国人研修生にとっても日本の暮らしや文化を知る良い機会となりました。



児童養護施設向けサッカースクール

三菱商事は住友商事・三井住友海上火災保険・三井物産・Jリーグ選手協会と協働で、1996年からJリーグの選手による児童養護施設向けサッカースクールを開催しています。

2002年からは、FC東京とベガルタ仙台のコーチ指導の下、東京都内と仙台市内の児童養護施設の小学生を対象としたサッカースクールも年2回ずつ開催しています。

毎年延べ300名以上の子どもたちが参加しており、技術指導を受けたり、社員ボランティアと試合を行ったりと楽しい1日を過ごしています。



上智大学寄付講座

三菱商事は、環境教育を支援するため1996年から上智大学で寄付講座を開講しています。上智大学の全学部生と社会人が対象の公開講座で、「地球環境と科学技術」がテーマとなっ

ています。毎年、「エネルギーと環境」「世界の人口問題」「環境リスクマネジメント」などのテーマで地球環境問題についての講義が行われ、年間約450名の学生・社会人が受講しています。



2000s

Mitsubishi Corporation International Scholarship

三菱商事は、発展途上国における青少年の育成と地域社会の文化・経済発展に継続的に貢献するため、海外拠点における奨学金制度「Mitsubishi Corporation International Scholarship」を2000年から導入しています。アジア・アフリカ・

中南米など発展途上国の15大学で実施しており、毎年約200名の学生に奨学金を授与しています。



2000s

KIDS パソコンクラブ

三菱商事は2000年から、住友商事、三井物産、NPO「KIDS」と協働で児童養護施設向けパソコン教室「パソコンクラブ」を実施しています。これは、東京都内の児童養護施設へパソコンなどのIT機器を寄贈し、ボランティアが毎月定期的に児童養護施設を訪問



して子どもたちとパソコン指導をはじめとするさまざまな交流活動を行うプログラムで、地域型の社会貢献プロジェクトとして注目されています。これまで延べ30名ほどの社員ボランティアが参加しました。

エコツアー「ボルネオ熱帯林植樹祭の旅」

2003年2月、マレーシア熱帯林再生実験プロジェクト(09ページご参照)の経過と成果を多くの人々に知ってもらうため「ボルネオ熱帯林植樹祭の旅」を実施、三菱商事・グループ各社の社員約30名が参加しました。参加者は、実験植栽地視察のほか、



マレーシア農業大学ピンツル分校内に現地の大学生らと約1,200本のフタバガ木科の苗を植樹しました(03年11月には2回目を実施)。

アースウォッチ

アースウォッチは、世界各地において科学者と一般市民による野外調査プログラムの支援を行う国際的なNGOで、1972年に米国・ボストンで創設されました。三菱商事では、2002年より支援を開始(欧州は93年、米州は96年から)、社員が実際にアースウォッチ



のプログラムに参加しています。これまでメキシコ湾でのウミガメの産卵調査、伊豆半島でのイノシシの生息密度分布調査などさまざまなプログラムに世界各地のオフィスから約90名の社員が参加し、環境への関心を高めています。

ボランティア体験講座

ボランティア活動を促進するため、2003年三菱商事は「知る」「体験する」「活動する」ことをテーマに「ボランティア体験講座」を開講しました。1回目は、高齢者の身体・精神面の変化などの講義、2回目は介護用具と介護保険についての講義のほか、高齢



者の不自由さを知るため、ギアを装着して歩行する高齢者疑似体験を行いました。3回目は千代田区の老人ホームを訪問し、ボランティア活動を実践。全3回の講座に延べ40名が参加しました。

社会貢献 30年の歴史 年表

1973年

- ・社会環境室を設置

1974年

- ・母と子の自然教室開始
- ・人工臓器の研究・開発開始

1975年

- ・リモート・センシング技術の研究開発援助開始

1978年

- ・春の自然教室(児童養護施設児童対象)開始

1979年

- ・東京コローへの支援開始
- ・太陽の家への支援開始

1983年

- ・三菱商事太陽設立

1988年

- ・再生紙事業開始

1990年

- ・地球環境室を設置
- ・熱帯林再生実験プロジェクト(マレーシア)開始

1991年

- ・社会貢献委員会設置
- ・米国三菱商事財団(MIC財団)設立
[オーデュボン協会、ネイチャーコンサーバンシー、ニューヨーク子ども動物園などを支援]
- ・外国人留学生奨学金制度開始
- ・地域貢献施策開始(国内/海外)
- ・七里ガ浜クリーンアップ開始 ~ 96
- ・長崎・大村湾の清掃開始 ~ 00
- ・中部支社自然教室(養護施設児童対象のキャンプ)開始
- ・大分国際車いすマラソン大会支援開始
- ・黒人医科大学へ支援(南アフリカ)
- ・ハレ大学冠講座を開設(旧東ドイツ)
など14件実施

1992年

- ・熱帯林再生実験プロジェクト(ブラジル)開始
- ・三菱商事欧阿基金設立
[ロンドン動物園、アースウォッチなどを支援]
- ・「さわやかハートネット」(社内ボランティアサークル)開始
- ・劇場「アトスフィア」への支援開始
- ・財団法人ジョン万次郎ホイットフィールド記念国際草の根交流センターの理事会社となる
- ・身障者スキー大会支援開始 ~ 99
- ・地域貢献施策
- ・はばたけ21 未来の子どもたちへ開始(新潟)
- ・「わんぱく教室(日帰りキャンプ)」開催(岡山)

- ・気象衛星の受信設備を寄贈(フィリピン)
など12件実施

1993年

- ・丸の内市民環境フォーラム開始
- ・国際フレンドシッププログラム開始 ~ 02
- ・「母と子の自然教室」20周年
- ・地域貢献施策
- ・学童通学用ミニバス寄贈(ヨルダン)
- ・西豪州盲人協会向け三菱車を寄贈(オーストラリア)
- ・植物園に希少種子保存設備を寄贈(インドネシア)
など9件実施

1994年

- ・手話講座・パソコン点訳講座開始
- ・地域貢献施策
- ・医療機器を寄贈(カザフスタン)
- ・新設図書館へ日本コーナーを寄贈(アラブ首長国連邦)
など5件実施

1995年

- ・阪神淡路大震災義援金贈呈
- ・北海道「夢登山」実施
- ・地域貢献施策
- ・山岳救助隊へパジェロ寄贈(ポーランド)
- ・三菱商事ミャンマー基金設立(ミャンマー)
- ・シアトル大学向け環境研究機材寄贈(米国)
など7件実施

社会貢献関連 支援先一覧

(2003年12月現在)

入会時期	団体名称	活動内容・目的	入会時期	団体名称	活動内容・目的
1960年	日本赤十字社	1877年の創立以来、人道と博愛の精神の下、100年以上にわたり災害救護・国際救援をはじめとする数々の人道的事業を行っている。	1996年	特定非営利活動法人 日本NPOセンター	新しい市民社会の実現のため、情報交流、人材開発、調査研究、政策提言などの活動を通じて、分野や地域を超えたNPOの活動基盤の強化と、それらと企業および政府・地方公共団体とのパートナーシップの確立を図ることを目的とする団体。
1965年	財団法人 東京基督教女青年会 (YWCA)	キリスト教に基づいた女性の社会教育団体として発足。すべての人が神の前に等しい価値を有することを信じ、会員相互の交わりを深め、人間の尊厳を守り、平和と正義のため世界の会員と共に活動することを目的とする。	1996年	社団法人 企業メセナ協議会	企業によるメセナ(芸術文化支援)活動の活性化を目的に、1990年に設立された公益法人。企業メセナだけでなく、文化政策やアートマネジメントなど芸術文化支援全般を対象とする、日本で唯一のメセナ専門の機関。
1967年	学校法人 日本聾話学校後援会	アメリカ人宣教師により開校、1933年工学博士山本忠興が理事長および校長となる。山本博士の校友・人脈から各方面へ後援会体制が拡大していった全国唯一の私立聾話学校。手話ではなく、聴覚主導の口話法による指導・教育を行う。	1996年	社団法人 日本フィランソロピー協会	ボランティア・マインドを醸成し、寄付の文化を育て、それを財源に企業・各団体と協力して新しいNPOを育成・支援。真の民主主義社会「フィランソロピー社会」を目指し、必要なインフラを整えるため幅広く活動。
1972年	財団法人 東京キリスト教青年会 (東京YMCA)	青少年の健全育成事業と地域のボランティア活動を支援。	1996年	特定非営利活動法人 スペシャルオリンピックス日本	スペシャルオリンピックス(本部:米国)は、知的発達障害のある人々(アスリート)の自立と社会参加を目指し、日常的なスポーツプログラムと、その成果の発表の場である競技会を提供する国際的なスポーツ組織。夏季・冬季の世界大会(各4年ごと)を開催している。
1979年	社会福祉法人 太陽の家	障害者の働く場づくりと社会的自立を支援する社会福祉法人。身体障害者がプログラマーやシステムエンジニアとして社会で就労するための授産科目「情報処理科」を支援。	2002年	特定非営利活動法人 アースウォッチ・ジャパン	地球の生態系や自然環境の変化に関心の高い科学者と一般市民(ボランティア)を動員し、人類の持続的将来に資する知識基盤の構築、ならびに自然資源と人類の文化遺産の保全を促進することを目的とした環境団体。
1979年	社会福祉法人 東京コロニー	社会就労センター(授産施設)や福祉工場などの働く場を通じ、障害者の「(社会への)完全参加と平等」を実現することを事業目的とする社会福祉法人。「重度身体障害者在宅パソコン講習」とその後の就労支援を事業の一つとしている。	2002年	特定非営利活動法人 国際協力NGOセンター (JANIC)	共に生きる地球市民社会を目指して、1987年に国際協力NGOのリーダーたちによって設立されたネットワーク型の市民団体。国際協力を担うNGOの活動を推進し、市民が活動しやすい社会基盤の強化を図ることを目的としている。
1992年	財団法人 ジョン万次郎ポイトフィールド記念 国際草の根交流センター	日米両国および世界各国の市民レベルでの草の根交流事業を行う財団。その中心事業が日米草の根交流サミット大会。	2003年	特定非営利活動法人 人道目的の地雷除去支援の会(JAHDS)	人道目的の地雷除去関連技術開発、国際NGOを含む現地地雷除去機関への関連技術供与や支援、地雷除去に必要な施設・設備類の提供による除去活動後方支援、地雷問題に関する国内外の情報収集および情報提供を行う。
1995年	ジュニア・アチーブメント ジャパン	1919年、米国で発足した世界最大の経済教育団体。将来を担う青少年に対し、一人ひとりが「考え、議論する」自立的判断力・社会適応能力などを身に付けさせるプロジェクト。各種教材やプログラムを学校に対して無償配布している。	2003年	社団法人 日本動物福祉協会	動物愛護法の周知徹底と動物関連法の整備などを行っている社団法人。動物のために、社会のために、互いを思いやる温かい社会を目指している。

1996年

- ・環境レポートの発行を開始
- ・日韓視覚障害者国際交流開始 ~ 00
- ・児童養護施設向けサッカースクール開始
- ・上智大学寄付講座開始
- ・地域貢献施策
- ・腎臓病検査機器の寄贈(バングラデシュ)
- ・北京市内へ桜苗木500本植樹(中国)
- ・低所得者地域の診療所改修増築(ペルー)など8件実施

1997年

- ・地域貢献施策
- ・地元貧困層の母子向け病院へ寄付(ポリビア)
- ・ベトナム古文書保存学術調査支援(ベトナム)
- ・ケニア保健省向けに救急車3台を寄贈(ケニア)など22件実施

1998年

- ・社会環境室と地球環境室を統合し、環境室となる
- ・ISO14001認証を本店にて取得
- ・長野パラリンピック通訳ボランティア社員参加
- ・地域貢献施策
- ・養護施設新設への資金協力(コロンビア)
- ・内戦で荒廃した小学校再建を支援(カンボジア)
- ・サハラ市向け救急車寄贈(ロシア)など17件実施

1999年

- ・ISO14001認証を国内6支社にて取得
- ・中南米災害復興支援チャリティイベント協賛(アートスフィア)
- ・地域貢献施策
- ・オリノコ川流域の自然環境回復計画支援(ベネズエラ)
- ・重慶市・長江上流域の被害修復援助(中国)
- ・モザンビーク地雷撤去訓練費用援助(南アフリカ)など28件実施

2000年

- ・Mitsubishi Corporation International Scholarship(海外奨学金制度)開始
- ・KIDS パソコンクラブ開始
- ・地域貢献施策
- ・障害児などの教育施設建設への支援(カタール)
- ・スリランカ・ケゴール地区へコンピューター寄贈(スリランカ)
- ・ハリケーン・ミッチー被災者用住宅150戸を建設(グアテマラ)など24件実施

2001年

- ・ISO14001認証取得を更新
- ・地域貢献施策
- ・米国同時多発テロへ義援金寄付(米国)
- ・モルドバ共和国向け救急車寄贈(ウクライナ)

- ・大連市向け献血車寄贈(中国)
- ・水害被災地帯へポンプ車寄贈(メキシコ)など21件実施

2002年

- ・環境レポートを「サステナビリティ・レポート」と名称変更し発行
- ・奥多摩湖クリーンアップ(広報部)
- ・FC東京サッカースクール・ベガルタ仙台サッカースクール開始(年2回)
- ・梯剛之ピアノリサイタル支援
- ・アースウォッチ支援開始
- ・地域貢献施策
- ・観光促進のための日本語ガイドブックなどの出版(ブルネイ)
- ・陶器製造トレーニングセンター建設支援(エチオピア)など21件実施

2003年

- ・『サステナビリティ・レポート2003』が「持続可能性報告大賞(環境大臣賞)」を受賞
- ・エコツアー「ボルネオ熱帯林植樹祭の旅」実施
- ・ボランティア体験講座開催
- ・三浦半島クリーンアップ&アート教室(広報部)
- ・社会貢献活動30周年
- ・地域貢献施策
- ・新型コロナウイルス(SARS)対策用に防護服寄贈(中国・台湾)
- ・戦後移民50周年記念祭へ桜寄贈(ブラジル)
- ・イラン地震被災者へ灯油ヒーター寄贈(イラン)など18件実施

広がる地域貢献施策

三菱商事は、地域社会の発展に寄与するため、1991年から社内募集により地域貢献施策を行っています。各場所から応募があった案件をもとに、地域のニーズに合った施策の実施を目指しています。スタート以来、200件以上実施しており、その中から四つの海外事例を紹介します。

インド

タゴール記念館の修復援助、インド・日本ギャラリー設置

2002年、日印外交関係樹立50周年に当たり、三菱商事はインドのコルカタにあるタゴール記念館の修復援助およびインド・日本ギャラリーの創設を行いました。この記念館は、アジア初のノーベル賞受賞者（文学賞）で日本との交流にも力を尽くしたことで知られるラビンドラナース・タゴール氏(1861～1941年)の功績を後世に残す

ためのもの。近代インドの先駆者たちと呼ばれるタゴール一族がかつて暮らしていた旧邸宅でもあり、現在は、ラビンドラ大学のキャンパスの一角に位置しています。

コルカタは三菱商事のインド拠点発祥の地で、インド国民と共に70年以上の歴史を歩んできた場所であることから、傷みの目立つ同館維持のため、三菱商事コルカタ



駐在事務所を通じて修復援助等を取り進めました。このインド・日本ギャラリーは、同館の最も大切な場所として保存されている、同氏が誕生した部屋の隣に設置されました。

ペルー

貧困層向けに診療所を建設

ペルー共和国アマゾン地帯ウカヤリ県の県庁所在地、プカルパ市では、長い間、医療施設の不足や貧困層の衛生改善が懸案となっていました。そこで、三菱商事は地域住民に医療サービスを提供するため、ペルー三菱を通じて、診療所の建設資金を支援しました。2000年1月、診療所引き渡し式が行われ、フジモリ大統領(当時)の名代のMINSa 厚生大臣(当時)、プカルパ市長、ペルー三菱商事社長が出席しました。式典では、地元の人々や現地マスコミが注目する中、「Donated by Mitsubishi Corporation」と書かれたプレートが除幕され、三菱商事の支援に対する大きな期待をうかがわせるものとなりました。



台湾

台湾地震の被災地域に三菱車を寄贈

1999年、三菱商事は台湾地震の被災地域の救済支援として、台湾三菱商事を通じ、三菱自工と共に、救援物資の輸送などに使用する三菱自工製デリカ4WDバン16台を寄贈しました。寄贈先は、被害の深刻な南投県をはじめとする各被災地域。台湾中部を襲ったマグニチュード7.6の大地震は、台中県・南投県を中心に未曾有の大惨事となり、停電と断水による産業界への影響は100億ドルを超え、経済面でも大きな打撃を与えました。そうした中、台湾三菱商事社長より、南投県の被災地域や経済建設委員会オフィスにおいて、震災見舞いと寄付目録が直接手渡され、現地関係者からたくさんの感謝の言葉を頂きました。



トルコ

トルコ西部地震被災地に 運搬用トラックとして三菱車を寄贈

1999年8月17日にトルコ北西部を襲ったマグニチュード7.4の大地震は、イズミット市を中心に未曾有の大災害となりました。震源地がトルコ最大の工業地帯であったため、経済面でも大きな打撃を受け、三菱商事の取引先であるサハンジ・コチ両グループ傘下企業でも多くの人的・物的被害がありました。三菱商事は、緊急の地域貢献施策として、救援物資運搬用のトラック、三菱自工製ピク

アップトラック9台をトルコ赤新月社に寄贈しました。9月16日、トルコ赤新月社イスタンブール事務所にて、イスタンブール支店長より震災見舞いと共に寄付目録が手渡されました。トルコ赤新月社は多数のスタッフを動員、被災地域でテントの配布・設置、食事や飲料水の提供を行いました。



三菱商事欧阿基金

三菱商事は、絶滅の恐れのある動植物を中心とした環境に関する教育研究活動を推進するため、1992年に英国で欧州・アフリカを対象とする基金(名称:Mitsubishi Corporation Fund for Europe & Africa)を設立し、数多くのプロジェクトに資金提供をしています。古くから自然環境保護に力を入れているロンドン動物園に対し、'95年のミレニアム自然保護センター設立や生物多様性関連展示施設「Web of Life」などを支援するほか、南アフリカ山猫プロジェクト、ジンバブエやナミビアにおけるライオンやチータなどと人間との関係に関する研究への資金援助も行っています。さらに、植物保護を目指す世界的な植物園ネットワーク、国際植物園保護協会も支援。また、自然環境保護活動を行う世界的非営利組織「アースウォッチ・インスティテュート」が主催する各種自然保護プロジェクトに、毎年ボランティアとして現地法人の社員を派遣しています。



ロンドン動物園の「Web of Life」

米国三菱商事財団

三菱商事は、米国法人 Mitsubishi International Corporation(本社ニューヨーク)と、米国の社会問題の解決に寄与するための財団(名称:MIC Foundation)を1991年設立しました。設立以来、環境教育活動のほか、経済的あるいは社会的に恵まれない青少年に対するさまざまな支援を行っています。また、支援活動の一環として、国際的な自然保護NGOであるオーデュボン協会(本部ニューヨーク)に寄付をしています。毎年1万名以上の人を訪れる同協会のサバルパームグローブセンターとサンクチュアリ(自然保護区)には、野外生物観察ステーションや蝶の飼育園などがあり、約200ヘクタールもの広大な保護地域に屋外シアターも設置されました。サバルパームグローブセンターでは、年間を通じて環境教育プログラムを実施しており、子どもたちが地球生態学を楽しく学べる機会を提供しています。



サバルパームグローブセンターで地球生態学を学ぶ子どもたち

社会貢献活動を想う

歴代室長からのメッセージ

これからも社会貢献活動を地道に継続してほしい



伊藤 靖夫

1983年3月～'87年2月社会環境室長

私が社会環境室長としてさまざまな事業に携わったのはもう20年ほど前のことになります。当時、三菱商事では「環境」「こころ」「福祉」の3つのテーマで社会貢献活動を続けていましたが、中でも「こころ」をテーマとした「母と子の

自然教室」は、私にとって非常に思い出深い活動でした。長野県飯森でスタートした開催地を群馬県大穴へ移し、さらにその後、新潟県吉里へと二度変更したこと、また、自然教室のリーダーに女子社員を起用したことなど、今も鮮明に記憶に残っています。東京都社会福祉協議会、東京YMCA、それぞれの地域の民宿の皆さんのご協力には、今も心から感謝しています。

この自然教室は3泊4日の短い期間ではありますが、参加者と共に民宿に泊まり、お世話をするリーダーたちの献身的な努力によって、参加者同士の心の触れ合いが生まれ、子どもたちの表情も日に

日に生き生きとしてくるのを実感することができました。

三菱商事の社会貢献活動は、利益の社会還元ではありません。「企業が存続していくための社会的経費」として負担していくという経営理念に基づいて、長年にわたり実践されてきたものです。こうした考え方が社会から高く評価されているのだと私は思います。厳しい経営環境下にあると思いますが、社会貢献活動を行うことは社員一人ひとりの人間性を高めることにつながり、ひいては三菱商事の発展につながっていくものです。だからこそ、今後も地道に継続してほしいと思います。

「誰かのため」が「自分のため」に



菱田 義男

1989年6月～'92年5月社会環境室長

私の就任当時、社会環境室の人員は最も少なく、活動に十分な人数とは言えませんが、諸先輩が築いてきた道を着実に歩いていこうと、スタッフ全員でアイデアを出し合いながら、社会貢献活動を推進していきました。応募が少なく

なってきた社員ボランティアについては積極的に社内公募をしました。その結果、企業の社会貢献活動、いわゆるフィランソロピーが脚光を浴び始めた時期とも重なり、1990年の「母と子の自然教室」の女性社員ボランティアが倍増したことや、男性社員へもボランティアを呼び掛け喜んで参加してくれたことは、うれしい思い出となっています。

'91年には社内には社会貢献委員会が設置され活動が全社的に拡大、「大分国際車いすマラソン大会」にボランティアとして、九州の支社・支店から社員が参加するなど、国内各場所の社員が自らのアイデアで動くことで、三菱商事の社

会貢献活動がさらに発展していきました。

在勤中に私を支えてくれた社会環境室のスタッフや活動に参加してくれた社員、また関係各所の皆様には心から感謝しています。私自身もやりがいを感じ、楽しく活動に取り組むことができました。

当時、活動に参加した社員たちは、「ボランティアは、誰かのためだけではなく、自分のためにもなる」ことを実感したとよく口にしていました。これは時を経た今も変わらぬものだと思います。こんな素直な気持ちで、受け継がれてきた三菱商事の社会貢献活動がこれからも続いていくことを心から願っています。



社員のボランティア活動日本一を目指して



中井 幸二
1992年6月～'95年1月社会環境室長

私が就任した1992年は、企業の社会貢献活動が活発化した時期で、多くの企業がメセナやフィランソロピーなどに取り組んでいました。そんな中、私は三菱商事の社会貢献活動をオリジナルティーのあるものにしたと考えました。

ただ単に資金を支援するだけの活動ではなく、社員自らが企画し参加するボランティア活動を行おうと考えたのです。

そこで、社内に「さわやかハートねっ」というボランティアサークルを立ち上げ、われわれ自身の手で活動の場を作り出していきました。「社員のボランティア活動日本一」を目指して取り組んだ日々は忘れられない思い出です。

こうした活動の一つが「大分国際車いすマラソン大会」です。仮設トイレの設置や撤去、ゴールした参加者に毛布や飲み物を渡すなど、社員が積極的に大会運営に参加しました。中でも、多くのボランティアが敬遠しがちな外国人選

手へ、気軽に声を掛ける光景を見て「さすが三菱商事の人間だ」と頼もしく思ったことを今も鮮明に覚えています。

それから毎年、延べ1,000人以上の社員が社会貢献活動に参加し、各メディアにもたくさん取り上げられました。

時代と共に、社会貢献活動の形態は変化するかもしれませんが、「母と子の自然教室」に代表されるように、ボランティアとして社員自らが参加するという姿勢は、変わらずに持ち続けてほしいと思います。今後も、三菱商事の社会貢献活動が発展を続け、ビジネスだけでなく、社会貢献の分野でも常にリーディングカンパニーで在り続けることを願っています。

社会あっての会社。母と子と関係者に感謝！



成田 誠一
1995年1月～'96年3月地球環境室長

私の地球環境室長時代は熱帯林伐採や塩田開発問題で世間の誤解や批判を浴びているときでした。社会あっての三菱商事。社会における企業の役割を改めて見直し、改善すべきところは改善し、主張すべきことは主張する、それは

「企業の社会的責任」です。来る日も来る日も、私たちは人に会い、批判に耳を傾け、誤解を解き、社会とのコミュニケーションに努力しました。今思い起こしても、社内外の関係者に感謝することばかりです。

お隣の社会環境室も社会とのコミュニケーションに努力していました。さまざまなビジネスを通して豊かな社会の実現に貢献してきた三菱商事ですが、「母と子の自然教室」のような社員参加型の活動も行ってきました。社会環境室には多くのボランティアが出入りし、夢を語り、企画を練り、活動の準備をしていました。夏が終わると彼らは一段と魅力的になっていました。

今考えると、吉里の自然教室で母や子や関係者と共に汗を流しながら、「こころ」というものを学んだのでした。

私はその後、地球環境問題対応と社会貢献活動の両方を見るようになりました。いずれも根本は会社と社会のコミュニケーションです。三綱領にある「所期奉公」は、英語ではCorporate Responsibility to Society、意味するところは実に明解です。社会あっての三菱商事。「母と子の自然教室」は30周年を迎えました。それは社員が「こころ」を学ぶ場でもあります。これまで参加してくれた約15,000人の母と子と関係者に感謝してやみません。

「母と子の自然教室」の30年

「母と子の自然教室」は1974年、春と夏の二回に分けて東京都内に住むひとり親家庭(開始当初は母子家庭と一般家庭)を招待し、春は岐阜県郡上郡明方村《当時》、夏は長野県北安曇郡白馬村飯森でスタートしました。その後、春は'78年から東京都内の養護施設の児童を招待

する「春の自然教室」(~'99)に移行。一方、夏は、'83年に群馬県利根郡水上町大穴、'85年からは新潟県南魚沼郡塩沢町吉里に場所を移し継続してきました。

自然教室の30年のあゆみを年代別に写真と共に振り返ります。

1970年代(1974~1979)

第1回は1974年5月に岐阜県で開催。夏には長野県白馬村で3泊4日を10会期開催し、東京の一般家庭母子約1,800名が参加しました。また、ガール・スカウトの方々にキャンプリダーとしてサポートしていただいていたいました。

'74年夏 草花教室



'74年夏 盆踊り



'78年夏 キツネのお面



長野県白馬村飯森ガイド(1982年)



自然教室30年のあゆみ

1973年

- ・第3事業の柱として「母と子の自然教室」基本計画案が実現に向けてスタート。

1974年

- ・ガール・スカウト日本連盟に「母と子の自然教室」への協力を要請。参加者の選定は、各地域の社会福祉協議会に依頼することになった。
- ・5月4日~6日、第1回春の「母と子の自然教室」を、東京、大阪、名古屋の母子家庭を招待して、2泊3日で開催。
開催地 / 岐阜県郡上郡明方村(旧奥住小学校《当時》)
参加者 / 母子家庭149名
- ・7月22日~8月25日、第1回夏の「母と子の自然教室」を、1会期3泊4日で全10会期、東京の一般家庭対象に開催。
開催地 / 長野県北安曇郡白馬村飯森

参加者 / 一般家庭母子1,874名

- ・読売ホールにおいて、夏の「母と子の自然教室」を撮影した記録映画『よみがえる心のうた』の映写会を開催。

1975年

- ・5月3日~5日、第2回春(白馬村飯森、1会期、東京の母子家庭114名)
- ・母子家庭参加者の写真集『地球っ子あつまれ』を作成、参加者ならびに関係者に配布、以後毎年継続。
- ・7月24日~8月23日、第2回夏(白馬村飯森、9会期、一般家庭1,207名)、10会期目は台風のため中止。
- ・ホテルニュージャンにて「母と子の自然教室」写真展を開催。

1976年

- ・5月1日~3日、第3回春(長野県小県郡青木村、1会

期、母子家庭119名)

- ・7月27日~8月27日、第3回夏(白馬村飯森、8会期、一般家庭886名、母子家庭286名)

1977年

- ・4月30日~5月1日、第4回春(青木村、1会期、長野県の母子家庭97名)
- ・7月27日~8月28日、第4回夏(白馬村飯森、9会期、一般家庭800名、母子家庭277名)
- ・作文集『ヤッホー! 白馬』を発行。

1978年

- ・この年より春は、母子家庭に代わり養護施設の児童を招待。4月28日~30日、新たに第1回「春の自然教室」を開催(埼玉県飯能市飯能、1会期、養護施設児童

'74年夏 キャンドルサービス



'78年夏 お餅つき



'74年夏 魚釣り



'77年春 キャンプファイアー



'78年夏 ロープ人形



- 114名)
- 7月26日～8月27日、第5回夏(白馬村飯森、9会期、一般家庭692名、母子家庭388名)

1979年

- 4月2日～4日、第2回春(静岡県田方郡土肥町土肥、1会期、養護施設児童120名)
- 7月26日～8月27日、第6回夏(白馬村飯森、9会期、一般家庭632名、東京・名古屋母子家庭525名)。
- 7月～10月、国際児童年にちなみ、三菱商事社屋に「自然教室」の写真展示。
- 『母と子の自然教室・5年の歩み』を発行
- 11月11日「母と子の自然教室・東京の集い」を、青山学院記念館にて開催。自然教室の同窓生を含め約2,700名が参加。

1980年

- 7月23日～8月13日、第7回夏(白馬村飯森、7会期、一般家庭570名、母子家庭428名)

1981年

- 4月2日～4日、第3回春(東京都西多摩郡檜原村数馬、1会期、養護施設児童78名)
- 7月23日～8月13日、第8回夏(白馬村飯森、7会期、一般家庭577名、母子家庭416名)
- 記録映画『よみがえる心のうた』が完成。

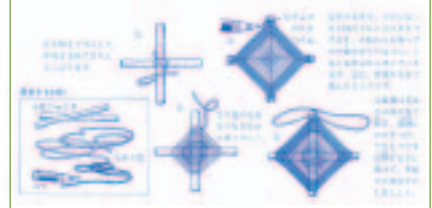
1982年

- 4月1日～4日、第4回春(檜原村数馬、1会期、養護施設児童116名)
- 7月28日～8月3日、8月9日～12日、第9回夏(白

馬村飯森、1・2・5会期、一般家庭297名、母子家庭136名) 台風により3・4会期は中止。

- 11月28日「母と子の自然教室・感謝の集い」が、スタッフ、地元協力者、ボランティアリーダーら約180名を招いて開催。

自然教室のお守りの作り方



1980年代(1980～1989)

1982年、台風に見舞われ2会期が中止になるハプニングが起こり、翌年に群馬県利根郡水上町大穴へ場所を移しました。その後、85年より現在の新潟県南魚沼郡塩沢町吉里へ再度開催地が変更されました。また、83年からは社員ボランティアがキャンプリーターとして運営に参加するようになりました。

'85年夏 野菜採り



'84年夏 民宿ごとに朝の体操



'86年春 ポートこぎ



'85年夏 ぼくとカブトムシ



'84年夏 谷川岳と自然



群馬県利根郡水上町大穴ガイド(1984年)



自然教室30年のあゆみ

1983年

- ・3月30日～4月5日、第5回春(山梨県南都留郡山中湖村平野、2会期、養護施設児童126名)
- ・8月5日～8日、第10回夏(この年より開催地が群馬県利根郡水上町大穴へ。前年度台風で中止になった会期の母子家庭107名を招く)
- ・本年から三菱商事女子社員がボランティアリーダーとして、毎年自然教室に参加することに。また夏の「母と子の自然教室」は、母子家庭のみの招待となる。

1984年

- ・3月31日～4月3日、第6回春(山中湖村平野、2会期、養護施設児童145名)
- ・7月25日～8月5日、第11回夏(水上町大穴、3会期、母子家庭271名)

1985年

- ・第1回から9回までの夏の「母と子の自然教室」開催地、白馬村に「母と子の自然教室・記念像」が完成。9月8日、関係者、参加者約50名が参加して除幕式が行われた。
- ・3月29日～4月1日、第7回春(山中湖村平野、1会期、養護施設児童126名)
- ・7月27日～30日、8月1日～4日、第12回夏(開催地は大穴から、新潟県南魚沼郡塩沢町吉里へ。2会期、母子家庭302名)

1986年

- ・3月29日～4月1日、第8回春(山中湖村平野、1会期、養護施設児童131名)

1987年

- ・7月26日～29日、7月31日～8月3日、第13回夏(塩沢町吉里、2会期、母子家庭301名)

1987年

- ・4月2日～5日、第9回春(山中湖村平野、1会期、養護施設児童119名)
- ・7月25日～28日、7月30日～8月2日、第14回夏(塩沢町吉里、2会期、母子家庭280名)

1988年

- ・4月1日～4日、第10回春(山中湖村平野、1会期、養護施設児童109名)
- ・7月30日～8月2日、8月4日～7日、第15回夏(塩沢町吉里、2会期、母子家庭290名)

'85年夏 みんなで歌おう



'85年夏 新幹線



'84年夏 ジャがいも掘り



1990年代(1990~1999)

1990年代に入り、春夏ともにボランティア社員を抽選で選ぶほどの人気イベントとして定着しました。そして20周年を迎えた1993年には参加した子どもたちの写真集『友達たち』を発行しました。

'95年春 浜辺で水遊び



'92年夏 山歩き



- 9月、「母と子の自然教室」15周年を記念して『地球っ子の15年』を発行。

1989年

- 4月1日~3日、第11回春(千葉県銚子市、1会期、養護施設児童110名)
- 7月22日~25日、7月27日~30日、第16回夏(塩沢町吉里、2会期、母子家庭250名)

1990年

- 3月29日~4月1日、第12回春(銚子市、1会期、養護施設児童119名)
- 7月28日~31日、8月2日~5日、第17回夏(塩沢町吉里、2会期、母子家庭251名)

1991年

- 3月28日~31日、第13回春(銚子市、1会期、養護施設児童115名)
- 7月27日~30日、8月1日~4日、第18回夏(塩沢町吉里、2会期、母子家庭252名)

1992年

- 3月26日~29日、第14回春(銚子市、1会期、養護施設児童120名)
- 7月25日~28日、7月30日~8月2日、第19回夏(塩沢町吉里、2会期、母子家庭249名)

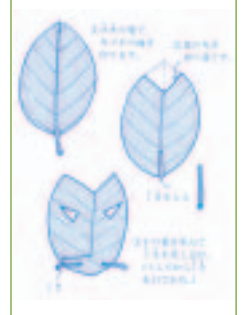
1993年

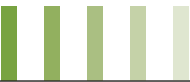
- 「母と子の自然教室」20周年、写真集『友達たち』を発行
- 4月1日~4日、第15回春(千葉県海上郡飯岡町、1



15周年記念誌
(1988年発行)

キツネのお面の作り方





'98年夏 肝だめし



'98年夏 解散



'92年春 線路でござん



'91年夏 おやすみなさい



新潟県南魚沼郡塩沢町吉里ガイド(2003年)



自然教室 30年のあゆみ

会期、養護施設児童118名)
 ・7月24日～27日、7月29日～8月1日、第20回夏(塩沢町吉里、2会期、母子家庭261名)

1994年

・3月31日～4月3日、第16回春(飯岡町、1会期、養護施設児童76名)
 ・7月23日～26日、7月28日～31日、第21回夏(塩沢町吉里、2会期、母子家庭278名)

1995年

・3月31日～4月3日、第17回春(飯岡町、1会期、養護施設児童122名)
 ・7月22日～25日、7月27日～30日、第22回夏(塩沢町吉里、2会期、母子家庭227名)

1996年

・3月30日～4月2日、第18回春(飯岡町、1会期、養護施設児童134名)
 ・7月27日～30日、8月1日～4日、第23回夏(塩沢町吉里、2会期、母子家庭270名)

1997年

・3月29日～4月1日、第19回春(飯岡町、1会期、養護施設児童111名)
 ・7月26日～29日、7月31日～8月3日、第24回夏(塩沢町吉里、2会期、母子家庭201名)

1998年

・3月27日～30日、第20回春(飯岡町、1会期、養護施設児童104名)

・7月25日～28日、7月30日～8月2日、第25回夏(塩沢町吉里、2会期、母子家庭198名)

1999年

・3月27日～30日、第21回春(飯岡町、1会期、養護施設児童94名)
 ・7月24日～27日、7月29日～8月1日、第26回夏(塩沢町吉里、2会期、母子家庭219名)

2000年

・7月29日～8月1日、8月3日～6日、第27回夏(塩沢町吉里、2会期、母子家庭215名)

2001年

・7月28日～31日、第28回夏(塩沢町吉里、1会期、

2000年代(2000~2003)

2003年に30周年を迎え、ますます元気な自然教室。
これからもたくさんの元気な笑顔に出会いたいと思っています。

'03年夏 ハイキング



'02年夏 お母さんと飛行機



'03年夏 スイカ割り



'03年夏 キャンプファイアー



母子家庭122名)

2002年

- 7月27日~30日、第29回夏(塩沢町吉里、1会期、母子家庭120名)

2003年

- 「母と子の自然教室」30周年
- 7月26日~29日、第30回夏(塩沢町吉里、1会期、母子家庭135名)

2003年母と子の自然教室スケジュール

	1日目	2日目	3日目	4日目
午前	朝9:00 東京駅集合 吉里着	ハイキング ブナ林の中で ハイキング	じゃがいも掘りと おにぎり作り 河原で昼食 (とん汁・おにぎり)	自由時間
午後	開校式 母親/母親オリエン テーション	子ども/手作りタイム 母親/ちまき作り	川遊び	吉里出発 17:00 東京駅解散
夜	夜の自然に 触れてみよう! (星や虫の観察など)	子ども/きもだめし 母親/母親教室	キャンプファイアー & お別れ会	

社員ボランティアの声

1年に1度本当の自分に戻る



中部支社 業務経理部
伊藤 雅之
(96 - 03年参加)

子どもと自然が好きという軽い気持ちから応募した初参加のときの「衝撃」は忘れることができません。経験者の方たちの真剣さ、熱さに圧倒された初日だったのです。しかし、4日間を共に過ごした私は、初日に感じたあの「真剣さ」を共有していました。真剣だから、一生懸命だからこそ、子どもやお母さんたちの心に響くものがある。そんなことを実感できた4日間でした。

私は1996年から毎年欠かさず参加しています。これは、もう自分のライフワークのようなもので、1年に1度自分自身を見つめ直す時間であり、本当の自分に戻る時間でもあります。お母さんや子どもたちだけでなく、自分も貴重な体験をさせてもらっているのです。

企業の社会貢献活動と言えば、ただ単にお金を寄付するだけのものが多い中、自然教室は、社員の手作りで30年も継続できている活動です。私はこんな活動を続けていける三菱商事の社員であることを、心から誇りに思っています。これからもずっと続けていってほしいし、続けていくべきだと思います。

できる範囲で社会に貢献することが大切



人事総務部
渡邊 恭功
(02、03年参加)

もともとボランティアには興味があったのですが、自ら進んで参加しようというほどではなく、偶然、同期に誘われたことをきっかけに、「何か自分にもプラスになることがあるかな」と軽い気持ちで参加しました。

自然教室に参加してまず感じたことは、「吉里の自然の素晴らしさ」です。ホテルの群れ、セミの脱皮、ハイキング、銀色に光ったコシヒカリなど、都会ではなかなか経験できない大自然に感動しました。また、そ

の自然の中で元気に遊ぶ子どもたちの笑顔や、一緒にはしゃぐお母さんたちの笑顔は、最高の思い出となっています。あの笑顔を見るだけでも、自分がこの活動に参加する意義、会社として取り組む意義があると思っています。

社会貢献活動を行う際、一人の力には限界があり、自分の力だけで大きな変化をもたらすことはできません。しかし、自分のできる範囲で、「社会に貢献するんだ」という姿勢・気持ちは重要です。これは企業の社会貢献活動に置き換えても同様で、一企業で地球上の環境を守ろうと大それたことを考えるのではなく、その企業ができる範囲で社会に貢献することが大事なのだと思います。

こんなすてきな活動、やめられない！

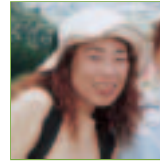


酪農食品ユニット
小林 陽子
(98 - 03年参加)

自然教室最終日の東京駅。これでみんなとお別れだ、と感傷に浸っていたら、「どく(私のキャンプネーム)！」とグループの子どもとお母さんたちに呼ばれました。「何？」と近づくと、私を囲んで「4日間ありがとう！何もあげられないけど、お礼をさせて」と言って、吉里でいつも歌っていた歌を私のために熱唱してくれたのです。その瞬間、疲

れや辛かったことが一気に吹き飛んだ気がしました。みんなと一緒にのんきに4日間を過ごしていただけた私に、感謝の気持ちを表してくれたのです。そんなみんなの心がとてもうれしく、またうらやましく、「私もいつまでもこんな気持ちを持っていたい」と思いました。私たちは立場こそボランティアでしたが、いつもこうやってみんなから何か得ているのです。「ありがとう」と思うのは私たちです。こんなすてきな活動、やめられないですよね。もっとたくさんの人に経験してもらいたい、そしてずっと続けていってほしいと切に願います。

ありのままの相手や自分を大切にしたい



ローソン事業ユニット
佐久間 成美
(90、92、93、95、98、00、03年参加)

「子どもが好きだから」という軽い気持ちで自然教室に初めて参加したのが1990年夏。当時は養護施設の子どもたち(何らかの事情により家庭での養育を受けていない)のための「春の自然教室」もあり、私はこれまで春・夏合わせて十数回参加しました。自然教室での4日間で心掛けていることは、参加者と真っすく向き合うこと。日ごろは「比較」や「相対評価」に慣れてしまっていますが、この4日間は「ありのまま」の相手や自分を大切にしたいと思っています。人との差は「優劣」ではなく「違い」。ありのままの相手を認め、受け入れることは、ありのままの自分をさらけ出すことにつながると思います。私にとって非常にエネルギーがいることであり、自分自身への挑戦でもあります。

数年前の「春の自然教室」のとき、私は小学校5年生の女の子から真剣なまなざしで「世の中には望まれずに生まれてきた子もいるの?」と問い掛けられました。私たちには知らされていませんが、複雑な事情を抱えている子どもたちもいるようです。私にはどうすることもできませんが、せめて、いつの日か自然教室を思い出したとき、心が温かくなり、少しでも元気が湧くような思い出をつくってほしい。毎回、そんな願いを込めて一生懸命に接しているつもりが、気が付けば、私の方こそたくさん力をもらい、多くのことを気付かせてもらっています。

仕事も自然教室への参加も本質は同じ



(株)ワード・コム出向
片岡 謙一
(92 - 98、03年参加)

3泊4日の自然教室に参加するため、ぼくは2日間有給休暇を取得する。どうして他人への奉仕活動のために貴重な夏休みを使うのかとよく不思議がられるが、ぼくはそんなときいつもこう言う。「自分のために使っているんです」と。

子どもたちがぼくらに対して心を開くときは、ぼくらの方が彼らに心を全開にしているとき。

彼らが心から楽しいと感じるときは、ぼくらがまず心底楽しんで遊んでいるとき。そして、みんなが自然の中で一番自然な自分を見つけ、そしてなりきったとき初めて、本当の自然教室になるといつも思う。そこには虚飾や偏見のない、心と心の通い合いと清々しい何ともいい気分があるだけだ。

ぼくにとって、年に1回自然教室に参加してボランティアをすることも、毎日会社へ行き仕事をするのも本質は同じ。どちらも「社会」に「貢献」することであると同時に、「教室」でもあるのだから。

参加親子の思い出

おいしかった、楽しかった、また行きたい！



原 智代さん
寿鶴さん(当時5年生)
02年参加

親の心配をよそに、リーダーに助けていただきながら、子どもたちはすぐに仲良くなって、あっという間に過ぎた4日間でした。

最終日に東京駅でみんなと別れるとき、泣きじゃくるこの子を見て、“来てよかった”と実感したものです。親の目からは、結構クールな子に見えていたんですが、涙を見て、もっと普段からこの子のことを見てあげないと、感じました。

参加前と比べると、みんなと一緒に過ごしたおかげで、周りに優しくなった気がします。私自身も皆さんから、“人生何でも一生懸命楽しみながらやっていかないと損だ”と教わりました。

「初めて見たホテル、ロープ人形作り、おいしかったご飯...全部が楽しかった。行けるものなら、またみんなで吉里、行きたいね」と、寿鶴も良い思い出になったようです。

忘れられない夏になりました。(原 智代)

決意を新たにした4日間



石渡 テル子さん
結花さん(当時5年生)
結美子さん(当時3年生)
84年参加

「母と子の自然教室」は、私たちのような母親と娘だけの家族では到底連れて行けない、また体験させてあげられない充実したプログラム内容でした。キャンプファイアーなど今でもさまざまな場面を鮮明に記憶しています。

私は主人を交通事故で亡くしたのですが、自然教室にはさまざまな事情でひとり親になった大勢の方が参加していました。ともに4日間を過ごし、自分と同じ思いで頑張っている仲間がいるんだと実感し、「私もしっかりしなくちゃ」と勇気が湧いてきたものでした。そしてお父さんの分まで頑張って育てなければいけないと決意を新たにしました。

当時参加した二人の娘は、現在長女は栄養士、次女は建築関係の仕事をし、充実した日々を送っています。

今でも自然教室に参加したときのバッジは親子で大切にしております！本当にありがとうございました。(石渡 テル子)

今も自然教室とつながっています



馬場 博子さん
千種さん(当時5年生)
88年参加

母と子の自然教室に参加したとき、私は小学校5年生でした。普段は忙しい母にわがママを言って甘え、独り占めできた、楽しく夢のような3泊4日でした。そして、

改めて、母の大切さを感じたことを覚えています。

時はあっという間に過ぎ、今、私は仕事とインテリアの勉強を両立し、忙しくも充実した日々を過ごしています。母もまだまだ現役で元気に働いていて、休日には一緒にサイクリングをしたり、ショッピングに出掛けたりします。そんなとき、「母と子の自然教室」が話題になることもあり、あの特別な夏の思い出と今も深くつながっていることを実感しています。

最近の母がよく口にする言葉は「今が一番幸せ」。そんな母をこれからもずっと大切にしたいと思っています。

ありがとうございました。(馬場 千種)

子どもたちの弾ける笑顔に感謝がこみ上げた



松原 仁美さん
憲一さん(当時6年生)
英子さん(当時3年生)
隆人さん(当時1年生)
87年参加

当時、近くに親戚もいなかった私は、相談できる親しい友人もなく、幼い3人の子育てに疲れ、生きている意味すら失っていました。

そんな時期に自然教室のお話を聞き、子どもたちに良い思い出ができることを祈りつつ参加したのでした。優しいお兄さんお姉さんに甘え、弾ける笑顔を見せる子どもたちに、心から感謝の思いがこみ上げてきたのが昨日のこのように思い出されます。

今では子どもたちも立派に成長し、それぞれの道で頑張っています。長女の英子は、夢だったOSK日本歌劇団で皆さんに夢を与える仕事をしています。(写真は、OSK日本歌劇団で活躍中の英子〔芸名：平松沙理〕さん)

うれしいことは自然教室で出会った方々をはじめとし、私も子どもたちもたくさんの方の良き友人ができたこと、若年母子の幸せを心から祈れる自分になったことです。これからも毎日、心に大きな太陽とひまわりの花を咲かせて生きていきたいと思っています。(松原 仁美)

「母と子の自然教室」を回顧する

場所探しに奔走、陰ながらの長い付き合い



井上 準二さん
株式会社アイ・ティ・フロンティア
代表取締役社長

リモート・センシング事業にかかわっていた縁から、84年、現在の開催地(塩沢町吉里)探しに一役買ってもらいました。

入社当時、宇宙航空機部に所属していた私は、社会環境室の「リモート・センシング事業」のお手伝いをしていた関係で、「母と子の自然教室」の開催地変更の

場所探しに力を貸すことになりました。学生時代ワングル部に所属し、山に詳しくなかったので「どこかいい場所を知らないか?」と聞かれていたのです。そこで、カメラマンの菅さんほか数名の社員と一緒に、土地勘のある新潟周辺を、土日を利用して5カ所ほど回りました。当時はまだ関越自動車道がなく、私のポロ車で三国峠を越えて2日かかりで走ったことを覚えています。結局、候補地の中でも、現地の方々が非常に親切だったことに加えて、安全面もクリアできた南魚沼郡の吉里に決まりました。その吉里での自然教室が現在まで続いているのは本当にうれしい限りです。

社会貢献活動のあるべき姿とは、本来に無償の行為であるソフトな部分と、将来的にはビジネスにつながる可能性を持つ「リモート・センシング事業」のようなハードの部分との両立だと私は考えます。こういった観点から、三菱商事は実にバランスの取れた企業だと、当時から誇りを持っていました。三菱商事には、今後も、常に時代に合った社会貢献活動とは何かを考え実行し、社員が誇りを持てる会社で在り続けてほしい。そしてわが社も三菱商事と共に、社員が胸を張れる会社にしていきたいと強く思います。

「五感に触れた本物の体験」を大切に



本行 輝雄さん
ロータリーの友事務所所長、
東京 YMCA 元ディレクター

84、85年、自然教室・総合ディレクターとしてリーダーやインストラクターをまとめてくださった頼もしい兄貴でした。

「母と子の自然教室」に参加したのは、1984年からの2年間だけでしたが、私にとっては密度の濃い有意義な期間でした。

当時、私はYMCAで青少年の野外教育や健全育成に携わっており、その延長で三菱商事の自然教室に参加、プログラム作成とリーダーの育成を担当することになったのです。初めて参加するとき、「自然教室は博物館的知識を得る所ではなく、五感に触れて実体験を積み重ねる場所。本物の体験をさせたい」というコンセプトを聞き、私は常にこれを念頭にプログラムを考えてきました。スタッフの方々と実際に吉里を歩いて、川遊びやピクニックの場所、昼ごはんの献立などを考えたことは、懐かしい思い出です。

今後、プログラム内容は、どんどん時

代に合ったものに変更していくべきだと思います。「たかがキャンプ」。一つの方法にとらわれることなく、アイデアを出し合ってほしい。もちろんその一方、「されどキャンプ」も意識する必要があります。これまでに培ってきた五感に訴える活動というコンセプトは受け継いでほしいと思います。

五感を使って生活体験を積み重ねていくのは、時代が変わった現在も、重要な教育テーマとなっています。子どもたちにとって、素晴らしい機会を与えられる自然教室が、いつまでも続いていくことを心から願っています。

自然教室がもたらした三つの効果



小島 セツ子さん
東京都社会福祉協議会特別研究員

元・東京都社会福祉協議会地域福祉部長。1回目から現在までお母さんたちの相談役として自然教室をサポートしていただいています。

30年前、企業の社会貢献活動について相談を受けたとき、「ひとり親家庭の旅の支援を」と提案したことを覚えています。そして「母と子の自然教室」開始以来、

毎年参加してきた私が今思うことは、自然教室には三つの効果があるということです。

まず、一つ目は参加者(母親と子ども)に活力を与える効果です。厳しい現実の中で生活している母親同士が出会い、語り合うことで生きる意欲を与えられ、その後も支え合っていると聞きます。また、学校で問題児扱いされていた子どもが自然教室に参加してリーダーやインストラクターと触れ合い、人の優しさを肌で感じたことで、すっかり“頑張り屋さん”になったという話もありました。

二つ目は、地域に与えた効果です。「自然教室」は、信州で始まり、現在は新潟県吉里と、いずれも豊かな自然を持つ地で

開催されています。冬はスキー客でにぎわう地域も、本来、夏は休眠地。そこで自然教室を開催することは、地域の活性化につながりました。また、地元の人々に「自然と共に生きる知恵」を母と子に伝承する指導者的役割を担ってもらったことなどは、地元の人々のやりがいとなっているのです。

三つ目は、三菱商事自身に与えた効果です。1983年から三菱商事の社員がボランティアとして活躍するようになり、「社員教育」という効果を生み出しました。

今ではすっかり東京都のひとり親家庭の「あこがれ」となった「母と子の自然教室」。これからもずっと続いていくことを祈念しています。

「こころ」を感じる体験が求められている



伊藤 由樹子さん(旧姓・福島)
1990～'96年三菱商事社会環境室

春・夏の自然教室担当者として活躍、現在は2児の母として子育てに張り切っているようです。

入社してすぐ社会環境室(当時)に配属され「自然教室」の担当を任されたとき、それまでの歴史の重みと責任を感じ、押しつぶされそうな気持ちになったのを覚えています。

ます。「自然教室とは何か」「何のために行くか」が常に課題となり、同室員とも随分模索しましたが、その際、社内外の多くの方々とお話しする機会を得られたことなどはとても貴重な体験でした。

三菱商事の社会貢献活動と共に自然教室も30周年を迎えられ、その継続の理由を改めて考えたところ、「こころ」という言葉に行き当たりました。納得いかないことを「ふに落ちない」という言い方をするように、人は心底納得したり、本当の意味で感動したりするときには、頭や心だけを使うのではなく、体を使ってまさに“体感”していると言われる。自然教室は「こころ」の事業として行ってきましたが、多くの

方々のご協力のおかげで体感の場面、すなわち、友を得た喜び、無心に遊ぶ楽しさ、自然に包まれた心地良さ、人の優しさに触れた感動、そして別れの寂しさなど、さまざまな思いを「こころ」だけでなく全身で感じられる場面がたくさんありました。この体感があったからこそ、次につながっていったのだと思います。そして、この「こころ」を感じる体験こそ、いつの時代でも求められているものだと思うのです。

また、自然教室だけでなく三菱商事のすべての社会貢献活動も、30年前と変わらぬ「こころ」があるからこそ、今も継続しているのではないのでしょうか。これからもずっと続いていくことを切に願っています。

発行日 2004年1月25日
発行所 三菱商事株式会社 社会・環境室
東京都千代田区丸の内2-6-3
TEL. 03-3210-7446 FAX. 03-3210-9257
URL <http://www.mitsubishicorp.com/jp/csr/>
制作協力 株式会社麴町企画
印刷 社会福祉法人東京コロニー

本誌記事の無断転載を固く禁じます。 ©2004 Mitsubishi Corporation この紙は、環境に配慮して無塩素漂白パルプ(ECFパルプ)を使用しています。